

バタイユにおける力動としてのエロス

若 林 梓

目 次

はじめに

第一章 人間、動物、エロティシズム

第一節 エロティシズム

第二節 濫澤による人間と動物の比較

第二章 内的体験

第一節 人間世界の独自性

第二節 内的体験

第三章 禁止と侵犯

第一節 暴力、労働、禁止

第二節 禁止と侵犯

第三節 宗教的行為

第四章 連続性と非連続性

第一節 エロスとタナトス

第二節 埋葬、死の認識

第五章 竹田によるエロス論

おわりに

注

参考文献

ニーチェ精神を色濃く受け継いだジョルジュ・バタイユは、それ

までの伝統的哲学諸学派が積極的には扱ってこなかった性、狂気、暴力、死といった人間の暗部についての諸問題を、あえて自分自身の探求するテーマとしてとりあげ、多角的な研究を行った。本論では、その中でも彼が特に深く探求したエロティシズムに関する研究に光を当てる。

バタイユのエロティシズム論をよみとくためには、現在のわれわれがもつエロティシズムの起源そのものに注目することが必要となる。第一章では、人間と動物とを本質的に異なるものとして区別したのは何なのかについて、濫澤のエロティシズム理論に手がかりを得ながら、いくつかの実例を見つつ論証したい。動物を性活動へと向かわせる力動と、人間が独自に持ちえたエロティシズムとの本質的な違いをあきらかにすることが本章の目的である。

第二章では、バタイユ思想の中でも重要視される「内的体験」について、竹田の「幻想」にヒントを得ながら考察。また、動物と人間の本質的な差異をあきらかにするため、人間の世界が持つ独自性に着目する。この、人間がその世界に独自に持ちえた性格とエロティシズムとの関係は深い。

伝統的西欧哲学において世界体験の原理は、認識であった。しかし、それが価値評価となって新たにわれわれに迫ったとき、世界をとらえる観点は大きく変化した。

動物の世界が「環境による世界」であるのに対し、人間の世界は「関係による世界」なのであり、主体がその世界のなかにあるとき、他者とのようにかかわっているかということにおいて動物と人間では根本的に異なっている。動物が生きている環境の世界とは弱肉強食の原理の世界であり、人間の生きる関係の世界とは価値秩序の世界である。

人間は他者との関係の中で自己を形成している。他者が自分をどう評価し、自分が他者をどう評価するかという「意味の網の目」(竹田)が原理となっているのが、人間の「関係の世界」である。この世界の原理は固定性も一義性も持たず、常に変容する。そのため人間は、主体と関係の世界の相互的な変容を基盤とするような、多義的で相関的な主体と世界との関係をもっている。

第三章・第四章では、実際の宗教的供儀の例や、埋葬に関する考古学的証拠をあげて論証。暴力、労働、禁止という流れは人間が人間となる歴史を語る上では欠かせない様相であり、バタイユもまたこれに注目する。かれはここで、エロティシズムにはつねに禁止と侵犯がついてまわってきたと述べることで、さらに独自のエロティシズム理論を絞り込んでいく。また、連続性と非連続性に関連したエロスとタナトスの問題について、フロイトの理論がどのように変化したかを参考にしたい。つねにエロティシズムと死とが隣り合わせになっているというバタイユの理論の中でも中核をなしている部

バタイユにおける力動としてのエロス

分に、ほかの観点からふれようというところみである。

埋葬や死の問題に関しては、客観的な資料として先史時代のデータを取り上げ、死に対する概念が人間の歴史の中でどのようにあらわれてきたのかを見ていきたい。

中期旧石器時代に生きたネアンデルタール人は、完全な直立歩行には達しておらず、まだ類人猿に似た外観であったが、かれらは、驚くべき巧みな石器を多く残し、さらには埋葬もおこなっていたことが判明している。道具を用いて労働をおこない、死に対する態度を決定していたことは、かれらが暴力へ対立しようとしていた証拠となるといえるだろう。先史学によれば、ネアンデルタール人に先立つ前期旧石器時代から、かれら同様に労働の痕跡を残す人類はいた。その遺骨からは、かれらが頭蓋骨に特別な関心を持ち、死に混乱を覚え始めていたことが推測されている。

しかし、現代の人類が行っているような宗教的な埋葬は、ネアンデルタール人が消滅する直前のこと、先史学者によってホモ・サピエンスと呼ばれる人類が現れる直前のことであるとバタイユは言う。死者や死に関するわれわれの禁止と類似の禁止があったことを、埋葬の習慣は証している。

バタイユの推測では、この死に関係する禁止の誕生は、労働の誕生と同時に起きていた。死に関係する態度を考察するうえで本質的に重要なのは、人間の死体と、それ以外の物体とのあいだの相違である。今日、この相違はさらに、動物に対して人間を特徴付けるも

のになっているともいえる。

われわれは生の状態から死体への変化を感得し、死体は不安をかきたてる。われわれが死と呼んでいるものは、第一にわれわれが死に対して持つ意識のことである。

最後に第五章では、竹田青嗣氏が説くエロス論について触れ、比較、批判をおこなう。

竹田は「エロスの世界像」の観点について語る。この観点は、世界がエロスの経験された秩序であるにとらえるもので、かれによればこれは、ニーチェのプラトニズム批判に始まり、フッサール、ハイデガー、バタイユへと受け継がれてきたものである。ここに独自の解釈を加え、人間という存在が生や世界を理解する原理を見出そうとするところが、竹田エロス論の主軸である。

竹田にとってエロスとは、欲望の概念そのものである。これは、あるシステムを作動させる動力についての概念ではなく、構造化し秩序化する原理なのであるという。人間が動物とは違うエロスをもったということについて説明するとき、竹田は「幻想的な身体」という言葉を用いる。この独自の用語が示すのは、人間は言葉の世界に概念の世界を持つがゆえに、人間の身体は単に物理的な外的刺激だけでなく何らかの意味に対して快や不快といった情動を発動させている、ということである。

この概念は、エロスや美を取り上げての価値の問題を語るときに

はとても有効なものとなるが、このような「幻想的な身体」を持つ生き物が人間であるという前提のもとに成り立っている竹田のエロス論は、人間の心理的概念についての哲学的解釈と、動物の欲望についての科学的なアプローチとをしばしば混同させているように思われる。人間と動物を比較して研究を進めるのであれば、バタイユがそうするように、エロスについて生殖や性行為そのものについての議論を避けては通れないが、しかし竹田青嗣がエロスという用語に認める性的な領域はいまいである。

このように語られる竹田独自のエロス解釈について、私は、生殖や性行為の意味を純粹に抽出しすぎて矛盾が生じていると考える。バタイユと彼とを比較することで、最先端の現代哲学が語るエロティシズム論理の軌道修正をおこないたい。